

現代家族の成員間関係性の調査

Survey of relationships between members of modern families

渡辺 直人

Naoto Watanabe

要 約

本報では、現代家族の情緒的構造を明らかにすることを目的にし、アンケート調査を行った。具体的には被験者の目線から、両親と自身の関係性についての認識を問うた。その結果、被験者と母親の情緒的つながりは強いが、被験者とその父親、またその父親と母親は「娘—母」に比して繋がりが弱いことが示された。また、被験者と父親の情緒的つながりを強めることが、父親と母親の結びつきにつながっていることが示された。

1. 研究の目的

我が国の家族関係について、かつては家父長制や家制度とあったように、家族という集団においては主に男性（父親）が権威をもってきたのは自明のことである。現代においては法も改正され認識も変化し、男女平等の価値観を。しかしながら実態をみれば、家庭の在り方は大きく揺れ動いているといえる。

元来家族という組織は最も小さい社会といわれることもあった。小規模であり社会の影響を直接的に受けるという脆弱的な性質を持つ組織であり、時代の変化・社会の変化に伴い家族の機能は変化していった（金城、1998）。具体的には、パーソンズは子どもの社会化とパーソナリティの安定の2つの機能になったと述べている。パーソンズはこれを喪失ではなく「専門的純化」と捉えた一方で、オグバーンは家族を愛情の機能に収縮されていくことを予測している。さらに、金城は家族の機能をマードック、オグバーンを参考に10の機能（性的機能、生殖機能、養育機能、生産機能、消費機能、教育機能、保護機能、休息・娯楽機能、宗教機能、地位付与機能）をあげ、それぞれの機能を調査データを参照に考察している。その結果、戦後は性的機能、消費機能、娯楽機能等は拡大化したと述べた一方、生殖、養育、生産、教育、保護、宗教、地位付与等の機能は、それぞれ縮小化してきたと述べており、家族の機能は少なからず変化していることを示した。

家族の機能だけではなく、意識においても変容している。例えば国立社会保障・人口問題研究所は出生の動向を数年おきに調査している。その調査「出生動向調査」では家族や性別役割分業に関する調査も行っており、第15回の調査においては「母親は家に」「夫は仕事、妻は家」といった性別役割分業的な考えは過去と比して減少していることがわかる。一方で、子どもを持ちたいと考える意識は低迷し、結婚には犠牲がつきものであるという意識が高まっている。また、生涯独身でもよいという考えも高まっている。

また、家族内の生活の時間も変化しており、例えば平日・休日ともに親子で一緒に過ごす時間は減少気味であることが明らかとなった。また、親が子と関わる時間においては、子と遊ぶ時間は減った一方で、子の勉強をみる時間は増加しているなど、家族、親子の生活時間においても変化していることが示されている。

このように機能も変化し家族の動態も変わっている中で、改めて家族に関して再考する必要があるのではないかと考える。特に家族は情緒的つながりが強い組織であり（落合、1989）、子にとってその両親の存在は大きい。親の養育態度の違いが子の情緒ないしアタッチメントスタイルに影響を及ぼすことは有名である。そのような中で、現代の学生の認識を問うことは、今後の家族動向を追ううえでも有意義なものであると考える。以上、本研究では家族生活研究の一助となるべく、現代の家族構造、具体的には調査対象者の両親（父母）間の実態とその構造を明らかにする。

2. 研究の方法

(1) 調査対象者

関西地方 A 短期大学 1 年生 76 名を対象とし、72 名から回答を得た。性別はすべて女性である。アンケートの回収率は 95%であった。

(2) 調査日・場所

2020 年 10 月 21 日。授業終了後、Google Form を用いオンライン上で回答を得た。

(3) 調査の手続き

質問紙調査法を行った。リッカート尺度の 6 件法で尋ねた。

(4) 質問内容

家族の情緒的な認識と過去の経験に関する質問(計 7 問)を測定した(以下、女子学生の家族認識尺度と呼称)。質問内容は、「問 1 昔から、私は父親と仲が良い」、「問 2 現在は、私は父親と仲が良い」、「問 3 子どものころは、よく父親が遊んでくれた」、「問 4 昔から、私は母親と仲が良い」、「問 5 現在は、私は母親と仲が良い」、「問 6 子どものころは、よく母親が遊んでくれた」、「問 7 私の両親は、仲が良い」の 7 項目を用いて測定した。項目の作成においては、印象は過去・現在においてに相関があることがわかっていることから、現時点での認識と過去の認識、さらには客観性を加えるためにも遊んだ経験を付け加えた。遊んだ経験については、遊びは関わりと同様の意義を持つと判断したためである。

また、尺度の信頼性については Cronbach の α 係数を算出し検討した。その結果、0.76 と十分な信頼性が確認された。

(5) 分析方法

各群に関しては Kolmogorov-Smirnov 検定で正規性を確認し、尺度は Cronbach の α 係数を算出し信頼性・妥当性を確認した。他、因子分析を行い尺度の因子構造を検討し、Friedman 検定と Holm の多重比較により代表値の差を確認した。最後に重回帰モデルのパス解析を行い、両親の仲に影響を及ぼしている変数を確認する。なお、分析には Microsoft 社の Excel、およびアドインソフトの HAD (Shimizu, 2016) を使用する。

(6) 倫理的配慮

本研究は調査実施にあたって十分な倫理的配慮を行った。具体的には、調査対象者に対して回答は随意であること、また被験者から得られたデータは厳正に保護し、個人情報外部に漏洩することはないこと、また回答の目的外利用はないことを事前に伝えた後に回答を得た。

3. 結果

本研究では、A 大学 1 年生 72 名(女性)に対し、家族認識尺度(計 7 問)を測定した。その結果をいかに示す。

(1) 基本統計量

まず、尺度および各群の基本統計量を以下に示す。具体的には、調査対象者数(有効回答数)、平均値、標準偏差、最小値、最大値をそれぞれ示す(表 1)。

「家族認識尺度」の尺度得点は、調査対象者数は 72 名、平均値が 4.8、標準偏差は 0.83、最小値は 2.95、最大値が 6 であった。

次に、各変数の基本統計量を以下に示す。表 1 と同様、調査対象者数(有効回答数)、平均値、標準偏差、最小値、最大値を以下に示す(表 2)。

表 1 女子学生の家族認識尺度 尺度得点

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	Min.	Max.
尺度得点	72	4.8	0.83	2.95	6

注) 7つの群すべての平均値をもとに算出

表2 女子学生の家族認識尺度 各変数基本統計量

	変数名	N	M	SD	Min.	Max.
問1	昔から、私は父親と仲が良い	72	4.79	1.21	2	6
問2	現在は、私は父親と仲が良い	72	4.57	1.49	1	6
問3	子どものころは、よく父親が遊んでくれた	72	4.35	1.41	1	6
問4	昔から、私は母親と仲が良い	72	5.36	1.05	1	6
問5	現在は、私は母親と仲が良い	72	5.5	0.84	2	6
問6	子どものころは、よく母親が遊んでくれた	72	4.57	1.39	1	6
問7	私の両親は、仲が良い	72	4.44	1.58	1	6

注) 「まったくあてはまらない……1、とてもあてはまる……6」とし、6件法で回答を得た。

表3 因子分析の結果

因子名	項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
母親 親密性	問5 現在は、私は母親と仲が良い	.96	-.13	-.02	-.06	.89
	問4 昔から、私は母親と仲が良い	.88	.15	.03	.04	.88
過去の 父母との 経験	問6 子どものころは、よく母親が遊んでくれた	.001	.92	-.21	-.16	.88
	問3 子どものころは、よく父親が遊んでくれた	-.02	.88	.23	.14	.87
父親 親密性	問1 昔から、私は父親と仲が良い	.06	.004	.94	.13	.87
	問2 現在は、私は父親と仲が良い	-.07	-.03	.86	-.25	.83
両親間の 親密度	問7 私の両親は、仲が良い	.04	.03	.06	-.94	.96
因子寄与		2.21	2.12	1.98	1.55	

注) 固有値設定はせずに分析を行った。

分析方法は主成分法プロマックス回転である。

結果、調査対象者数は全ての変数において 72 名であった。平均値は問5、問4、問1の順で大きかった。標準偏差は、問7、問2、問3の順で大きかった。最小値は問1と問

5が2であったがそれ以外の変数は1であった。最大値は全ての変数が6であった。

次に、これらの変数間の代表値を比較・検討する。

(2) 因子分析

上記の尺度を因子分析を用い検討した。具体的には、主成分法のプロマックス回転を用いた。また、本尺度は項目の特性を鑑み、4つの因子を想定して筆者が項目・尺度を作成した。そこで、因子数は4に設定し分析を行った。以下、因子分析の結果を示す(表3)。

結果、4つの因子を設定し主成分法プロマックス回転を行った結果である。①「問5と問4」、②「問6と問3」、③「問1と問2」、そして④「問7」の4つに分けられた。これらの因子(潜在変数)に関しては、①は「母親親密性」と名付けた。また、②は「過去の父母との経験」と名付けた。③は「父親親密性」と名付けた。④は「両親間の親密

度」と名付けた。

(3) 代表値の差

本項では、各変数間の代表値の差を比較・検討する。ま

表4 Friedman 検定の結果

要約統計量	
検定統計量 $\chi^2 =$	88.52
df =	6
p =	.000

表5 Holmの多重比較の結果

水準の組	順位 の差	効果 量 <i>r</i>	95%CI	Z値	p値	調整 p値
(1) 昔から、私は父親と仲が良い - 昔から、私は母親と仲が良い	-1.01	-.23	-.38, -.07	-2.8	.005	.062
(2) 昔から、私は父親と仲が良い - 現在は、私は母親と仲が良い	-1.17	-.27	-.42, -.12	-3.26	.001	.02
(3) 現在は、私は父親と仲が良い - 昔から、私は母親と仲が良い	-1.27	-.29	-.44, -.14	-3.53	.000	.006
(4) 現在は、私は父親と仲が良い - 現在は、私は母親と仲が良い	-1.44	-.33	-.47, -.18	-3.99	.000	.001
(5) 子どものころは、よく父親が遊んでくれた - 昔から、私は母親と仲が良い	-1.85	-.43	-.55, -.29	-5.15	.000	.000
(6) 子どものころは、よく父親が遊んでくれた - 現在は、私は母親と仲が良い	-2.02	-.47	-.59, -.33	-5.61	.000	.000
(7) 昔から、私は母親と仲が良い - 子どものころは、よく母親が遊んでくれた	1.66	.38	.24, .51	4.61	.000	.000
(8) 昔から、私は母親と仲が良い - 私の両親は、仲が良い	1.52	.35	.2, .49	4.22	.000	.000
(9) 現在は、私は母親と仲が良い - 子どものころは、よく母親が遊んでくれた	1.83	.42	.28, .55	5.07	.000	.000
(10) 現在は、私は母親と仲が良い - 私の両親は、仲が良い	1.69	.39	.24, .52	4.69	.000	.000

注) 全変数間でHolmの多重比較検定を行った。

そのなかで有意差・有意傾向が確認できた組のみを示した。

ずはじめに、代表値の検定を行う前に正規性を確認する。具体的には問1から問7の全群に対しKolmogorov-Smirnov検定を行った。その結果、検定および尖度・歪度において適した数値は算出されなかった。他、各群のヒストグラムをみても正規性が確認できる結果は表れていなかった。そのため、全ての群において正規分布に従っていないことが示された。

次に、全変数の代表値の差を検討するため、Friedman検定、およびHolmの多重比較法を行った。まず、Friedman検定の結果をいかに示す(表4)。

この結果から本尺度の代表値の差において有意性が確認された($\chi^2(88.52)$, $df=6$, $p<.05$)。

次に、変数間の比較のため、Holmの多重比較を行った。有意差が確認された結果のみを示す(表5)。

10組の比較において有意差・有意傾向が確認できた。特に問3「現在、私は母親と仲が良い」は、問2「現在、私は父親と仲が良い」、および問7「私の両親は、仲が良い」との間で有意な差が確認できた。また、問2と問7は有意差は確認できず、基本統計量に示した平均値も高くない。この結果から、「自身、及び両親の3者間」では、「自身は母親と結びつきが強く、父親との結びつきは低い」ことが示された。さらに母親と父親の結びつきも低いことも示されており、このことから、父親は娘・母親の両者とも結びつきが薄いことが示唆された。

(4) 因果関係

最後に、因果関係を探るため重回帰モデルのパス解析を行った。具体的には、問7「私の両親は、仲が良い」に対

し、他の問1-問6はどの程度影響しているかを測定した。

その結果、パス係数においては問2、および問6で有意な結果が確認できた。それ以外の群では有意差は確認できなかった。また、問2および問6の係数は有意差が確認できたものの、パス係数は低く、問7への因果関係はわずかであることが示された(表6)。

他、問1・問6の共分散を確認したがこちらも有意差は確認できなかったため、問1と問6は互いに独立していることも示された。

以下、問7に対して有意であったパス問2、問6の重回帰モデルのパス図を示す(図1。非有意だったパスは削除)。

以上、パス係数が高いとは言えないことから、両親同士の仲の良好さの構築につながる主な因果を明らかにできたとはいえない。変数ないし調査対象者を増やし、さらに増やし検討してみる必要性がでてきたといえる。

4. 考察

以上、本研究では現代家族の家族間構造を明らかにすべく、家族仲に関する認識を問うた。結果を分析した結果、まず因子分析では想定した通り4つに分類されることが明らかとなった。次にFriedman検定および多重比較では、父親が孤立傾向にあることがわかった。具体的に、娘である自身は母親と昔も今も仲が良いこと、父親は母親と比して昔も今も仲がいいとは言えないこと、そして両親の仲は良いとは言えないことが明らかとなった。他、パス解析に

表6 パス解析の推定値とp値

	推定値	p値
昔から、私は父親と仲が良い	-0.08	.68
現在は、私は父親と仲が良い**	0.34	.02
子どものころは、よく父親が遊んでくれた	-0.13	.42
昔から、私は母親と仲が良い	0.16	.5
現在は、私は母親と仲が良い	0.44	.11
子どものころは、よく母親が遊んでくれた**	0.31	.046

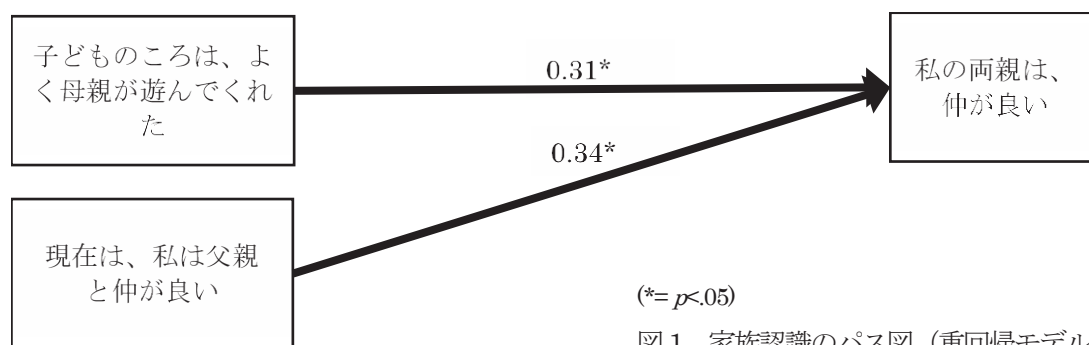


図1 家族認識のパス図 (重回帰モデル)

においては、娘（自身）が父親と仲良くなること、子どもの頃に母親とよく遊ぶことが、両親のつながりを強めさせることにわずかながらつながっていることも明らかとなった。

これらの結果に関して、父親の孤立傾向に関しては先行研究と一致している。茂木（2003）は調査対象者の家族の心理的距離を測定した。その結果、被験者と父親の結びつきは弱い傾向にあることが浮き彫りとなった。しかしながらその研究では、被験者自身とその父親の結びつきの弱さが浮き彫りになったが、父母間の結びつきは高い傾向にあった。本研究では父母間の結びつきも高くない結果が出ており、現代では家族の在り方というものも変化していることが示唆されたといえよう。

ただし、本研究において基本統計量の平均値をみると、父親に対する親密度は極端に低いということではない。すなわちこれは「自身および両親の3者間で、父親が孤立している」というよりも、「自身と母親との情緒的結びつきが、父親よりも強い」との解釈が的確なのではないかとも考える。父親が確かにこの3者の中では結びつきが弱いのは明らかになったが、家族内で孤立していると言い切ることは難しいのではないかと考える。

次に、本研究では、娘自身が父親と仲良くなると、両親間の仲の良さもわずかに高まることが示唆された。この結果に関しては情報が不十分で現段階では結論をだすことは難しいだろう。そのうえこの結果は被験者属性が「女性」の一方のみである。そのため息子すべてに当てはまるものではなく、男性も含め、そして幅広い年代で息子、確認してかあら

また、幼いころに母親と遊ぶことが両親間の仲の良さにつながっている結果に関しては、筆者が探ったうえでは先行研究も乏しく考察が難しい。ただし新たな知見として提

示できたともいえ、家族心理学発展の一助となる結果を得られたのではないだろうか。

また、本研究の課題として、家族構造の全体像、そして家族の凝集性の因果関係が明らかとはならなかったといえよう。自身が父親と仲良くなることが両親の仲を深めさせることにわずかながらつながることが示唆された。しかしパス係数は低く、これだけでは説明がつかないといえる。

他、本尺度では「被験者自身」と「父親」「母親」の3者関係のみに焦点をあてたものである。家族は姉妹もいれば、祖父母と同居している家族もいよう。細かくみれば形態はさまざまである。家族の問題を考察するうえでの基本的な考え方は、「誰々が悪い」から「こうなった」と「直接因果律」ではなく、人的・物的環境が相互に、そして複雑に影響しあい、巡りめぐって問題が現前に生じられるという「円環的因果律」であると考えられている。そのため、「家族」という広義なものに着目するのであれば、少なくとも主な家族成員（共同生活者全員）すべてを考慮する必要があるほか、家族のみならず「日常生活」に着目し、変数をさらに増やし、それらの因果を確認していくことで、はじめて課題・相関・因果などの全体像が明らかとなると考える。

謝辞

アンケート調査にご協力くださった皆様におかれましては、ここに改めて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

参考文献

- 金城一雄 (1998) . 近現代日本における家族機能の変容. 沖縄短大論叢 12(1), 99-124
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017) . 『2015年社会保

障・人口問題基本調査(結婚と出産に関する全国調査)現代日本の結婚と出産―第15回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査)報告書―』。「Ⅲ部 独身者・夫婦調査共通項目の結果概要：3. 結婚・家族に関する意識」。国立社会保障・人口問題研究所, http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/gaiyou15html/NFS15G_html12.html, 2021年1月4日取得

CITIZEN (2012)。「親子のふれあい時間」調査。<https://www.citizen.co.jp/research/time/20120604/04.html>, 2021年1月4日取得

落合恵美子 (1989)『近代家族とフェミニズム』勁草書房

(本多真隆 (2016) . 近代日本における家族情緒の問題：近代家族論と家族究の検討を通して, 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学・心理学・教育学：人間と社会の探究 (82), 57-73 を参照)

茂木千明 (2003) . 家族図式による現実と理想の家族関係の比較：家族関係単純図式投影法を用いた体験学習から。仙台白百合女子大学紀要 7 巻, 29-43

Shimizu, H. (2016). An introduction to the statistical free software HAD: Suggestions to improve teaching, learning and practice data analysis. *Journal of Media, Information and Communication*, 1, 59-73.